

# 女性同性愛者と異性愛者によるグループ交流会が 相互理解に与える影響

## Influences of The Group Meeting on Mutual Understanding among Lesbian and Heterosexual Women.

池ノ谷 和

人文科学研究科

臨床心理学専攻

Nodoka Ikenoya

Graduate School of Humanities, Division of Clinical Psychology

### 要 約

LGBへの関心は近年、世界的にも高まっており、国内でもセクシュアル・マイノリティへの関心が高まりつつあるが、LGBTを理解するための具体的な活動はあまり進んでいない。異性愛者が同性愛者について正しい知識を身に付け、直接肯定的な関わりをもつことが真の同性愛理解へ繋がると考え、本研究では女性の同性愛者と異性愛者のグループ交流会が相互理解へ与える影響について検討した。全4回のグループ・セッションを実施し、その実施前と実施後にSD法質問紙調査を行い、グループ・セッション終了後には一人30分程度の半構造化面接を行なった。女性同性愛者2名、異性愛者3名によるグループ・セッションと各メンバーのSD法質問紙、面接調査の結果から以下の見解が得られた。①各メンバーが自己理解と他者理解をグループ体験の中で同時に行なっており、これらがポジティブな体験として深まっていくことで相互理解が促進された。②自己理解・自己受容がネガティブな形で行われた場合、他者理解や相互理解はあまり促進されなかった。その背景には、レディネスが整わないうちに自己開示をしなければならないグループ構成が影響している可能性が考えられた。③同性愛への知識が深まることや偏見の低減が相互理解の重要な促進要因として考えられた。④自己理解や他者理解の深まりにはグループの安全な雰囲気の中で深い話をするための基盤が作られることが重要であることが分かった。

【Key Word】 女性同性愛者 異性愛者 グループ交流会 相互理解

### I. 問題と目的

#### 1. LGBTの現状

セクシュアリティの在り方は非常に多岐に渡るが、それが男女二元論や異性愛主義(heterosexism)に対応しない場合「セクシュアル・マイノリティ (sexual minor-

ity)」と呼ばれる。近年では、より差別的ニュアンスを排除した呼称であるLGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender)という言葉も耳にする機会が増えてきている。LGBTのうち、LGBは性的指向に関するもので、Tは性自認に関するものである

と分類できる。LGBの特徴の1つは「見えないマイノリティ」であることで(石丸, 2016)、自分の身体への嫌悪感が見られないことがTとの違いである(石丸, 2008)。金城(2016)は相談機関への来談時にTの人々の主訴は性別違和やそれに伴う対人関係のように明確であることが比較的多いが、LGB群は心身の不調のように主訴がはっきりとしていないことが多いと述べている。このような点から、LGBとTの人々の間では、当事者の意識に違いがあることが考えられ、したがって彼らが抱える問題や支援のニーズにも違いがあることが推察される。

セクシュアル・マイノリティに関心を持ち知識を身に着けることやジェンダー・センシティブの姿勢の重要性がLGBの理解に繋がることを示唆する研究(柳原; 2000, 稲葉; 2010)がある一方、学校教育では依然として教科書には異性愛のこのみ書かれており、性教育のほとんどが異性愛を対象とした授業が行われている(上野, 2008)。こうした環境は当事者たちに疎外感を抱かせ、自身のセクシュアリティについて否定的に受け入れざるを得ない環境である(日高, 2016)。また、日本の臨床心理士を対象とした調査(Matsutaka et al, 2014)では、大学院進学者のうち専門養成課程で同性愛について学んだ者が14.8%にすぎないことも明らかにされており、彼らを支援する者ですら同性愛について十分な知識を持ち得ていないことも示されている。これらの点から、わが国の現状として、セクシュアル・マイノリティへの理解が必要であると指摘はされているものの、実際の具体的な活動はあまり進んでいない

ことが推察される。

## 2. 真の同性愛理解とは

同性愛への知識を深めることは異性愛者の同性愛者への肯定的態度に影響を与えることが明らかになっている反面、自身の近くに同性愛者がいる場合はそれに限らないということも示されている(桐原・坂西; 2003, 和田; 2010)。心理職従事者においても同様の指摘があり、松高(2016)はセラピストは同性愛に関する知識を取り入れるとともに自らの価値観に向き合うことが重要であると述べている。セラピストがLGB肯定的カウンセリングを行うことはLGB当事者の自己肯定感の向上に効果的であり、そういった姿勢がセラピストの異性愛バイアスを減少させる(Dillon et al; 2008)という報告から、異性愛者が同性愛者について正しい知識を身に着け、カウンセリング場面のように双方が直接肯定的な関わりをもつことが真の同性愛理解へと繋がるのが考えられる。

そこで、筆者は自身が過去にエンカウンター・グループ(Encounter Group以下、EG)に参加した経験からグループを通して他者との直接的な関わりをもつことが様々な違いを多様性(diversity)として尊重し、受け入れ合うことに繋がるのではないかと考える。EGの目的は「自己理解」「他者理解」「自己と他者の深くて親密な関係の体験」で(野島, 2000)、廣(2009)は女性同性愛者に対しEG的なサポート・グループを実施し、グループがメンタルヘルス、心理的サポート、コミュニティ交流等に効果があることを明らかにしている。また、柳原(2000)はセクシュアリティ教育において、自己認知と相互交流

による他者理解を意図的に組み込んだカリキュラム構成の必要性を指摘しており、これらの条件を含んだEGはLGBT理解に有効な手段であると考えられる。

### 3. 本研究の目的

本研究では、女性の同性愛者と異性愛者のグループ交流会が両者の相互理解へ与える影響について検討する。セクシュアル・マイノリティの問題に関わらず、女性のセクシュアリティに関する研究が今まであまりなされていないという指摘（金城，2016；石井，2009）があることから、本研究で女性を対象に研究を行うことには意義があると思われる。

## II. 方法

### 1. 研究協力者

20～30代の女性同性愛者2名、女性非同性愛者3名。

グループの安全性を考慮し、Cass（1979）のLGBのセクシュアル・アイデンティティモデルを踏まえ、比較的アイデンティティが安定した状態にあると思われる20歳以上の女性を調査対象とする。なお、本研究での女性の同性愛者とは「性自認、性的指向が共に女性で、自らを同性愛（Lesbian）と名付けている人々」とする。

### 2. 研究期間

2016年4月～10月

### 3. 研究手続き

グループ交流会、質問紙調査、面接調査を行う。グループ・セッション開始前と終了後に質問紙調査（SD法）を行い、さらにグループ・セッション終了後1人あたり約30分の半構造化面接を行う。なお、グループ交流会はグループの安全性と有効性

を考慮し、森園・野島（2006）が提唱した半構成型EGに従う形をとり、1回120分で各回にテーマを設けた（1回目「自己紹介」、2回目「わたしにとっての対人関係とは」、3回目「わたしにとっての異性・同性とは」、4回目「これまでの体験を振り返って」）。

### 4. 質問紙（SD法）作成のための予備調査

グループ・セッションの効果を測定するためのSD法を作成するために、「異性愛とは/同性愛とは、の言葉に続く一文を作って下さい」という教示のもと、異性愛/同性愛のイメージを尋ねる質問紙調査を行った。

(1)対象：本大学院修士課程に所属する女性20名

(2)調査期間：平成28年5月

(3)分析方法：得られた文を文意を見ながらいくつものカテゴリに分け、形容詞対義語を当てた。調査者と修士課程大学院生4名、本学教授と共に検討し、最終的に16項目のSD法質問紙を作成した。

### 5. 質問紙調査

(1)フェイスシート：年齢、職業、性的対象者を尋ねる。

(2)SD法：予備調査で得られた形容詞対義語16項目について「異性愛/同性愛について当てはまるところに○をつけてください。」という教示のもと尋ねる。

### 6. 面接調査

全4回のグループ・セッション終了後、1人につき約30分の半構造化面接を行う。尋ねる内容は以下の2項目である。

- (1) グループ・セッションを通して思ったこと・感じた事
- (2) グループを体験したことによる心境の変化

## 7. 分析方法

### (1) グループ・セッション

語られた内容を分け、事例研究的に内容の検討を試みる。

### (2) SD法

Pre調査とPost調査の結果の変化について検討をする。

### (3) 面接調査

面接時に研究協力者の了承が得られた電子情報を逐語記録として文字におこした。その後、研究者が事例研究的に内容の検討を試みる。

## 8. 倫理的配慮

本研究は本学倫理委員会にて承認を得た(認証番号:16013)。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. グループと参加者の経過

研究協力者および研究者については以下のように記載する。【A:20代女性異性愛者、B:30代女性同性愛者、C:20代女性異性愛者、D:20代女性同性愛者、E:20代女性異性愛者、S:研究者20代女性異性愛者】

なお、Se1.の記録は録音ができなかったため、研究者の記録に基づく内容である。Se2.以降は録音があるのでそれに基づいた記録となる。

#### ● Se1.「自己紹介」

##### (1) 4分間トーク

S:心理学をやっており、今回の会の主催者である。夏休みは学会、ワークショッ

プ、音楽フェスなどで国内を移動することが多かった。忙しくも充実した日々を送ったと感じている。

A:名前、所属、星座、血液型、今回の研究に参加した経緯を話す。インドア派で夏休みは家にいることが多かった。部屋の片づけをしたら読んでない本がたくさん出てきた。現在は中学校へボランティアに行っている。

B:レズビアンであるとカミングアウト。今回の研究に参加した経緯を話す。市民団体に所属しており、LGBTに関わる活動をしている。X県で初めてLGBT成人式を催行した。今回はLGBTに関することなどみんなと話せたらいいなと思っている。

C:今回の研究に参加した経緯と研究者との関係を話す。8月は学生生活最後の夏休みということで悔いがないよう海外旅行にたくさん行き、初めて海外で一人旅もした。でも、写真とかの面で友達と回る方が楽しいかなと思った。

D:レズビアンであるとカミングアウト。今回の研究に参加した経緯を話す。人見知りですごく緊張している。趣味の話。コミュ障だけど、人と話すのは好き。類は友を呼ぶという感じでバイセクシュアルやレズビアンの子からカミングアウトされることが多い。

E:名前、所属、星座、今回の研究に参加した経緯を話す。今は卒論を書いている。日本文学を専攻しており、よく分からない字を読んで過ごしている。家族は兄が2人と双子の弟がいる。弟の話を中心に行う。

##### (2) フリートーク

###### 1) 〈繋がる〉ということについて/2)

カミングアウトすることについて/3)  
LGBT成人式について/4) 家族について  
(3) 筆者のコメント

初対面ということもあり、Sを含めメンバー全員が緊張した面持ちだった。会の進行やスタイルに戸惑いを抱えている様子も窺えた。序盤はSが質問し、その答えをSに返すというような二者関係でのやりとりや沈黙が多く、話題の移り変わりも早かった。中盤になると徐々にメンバー同士のやりとりも増え、当たり障りのない話ながらも盛り上がる場面が見られた。中盤～後半ではEが弟、家族について語る場面が多く、メンバーに話題を振ってしていた。Cは自然な感じで自分の話も組み込んで話し、AやDは聞き役で話題が振られると話すという感じで、Bは頷いて話を聞いていた。

● Se.2 「わたしにとっての人間関係とは」

(1) 4分間トーク

S：人間関係は苦手だけど好き、アンビバレントな気持ち。自分を出せないから嫌な面と刺激を貰えるから好きな面とある。男女で人間関係の在り方が違う。

C：人というのも1人でいるのも好き。べたべたするのは好きではないけど、知らない人と話す自分の世界が広がる感じがして楽しい。転機は大学に入ってからかもしれない。今は人と関わる仕事をしたいと思っているが、それまではそういう仕事をしたいとは思っていなかった。

E：対人関係は嫌いでも苦手でもないけど相容れないもの。2人と違ってべったりした付き合いが得意。中高時代が大きく影響している。特定の子と一緒にいて得られ

たものを他の人に崩されるのが嫌。テリトリーを侵してほしくない。

B：自分が確立していない。人とどうこうってよりかは自分がどうなのかを20代まで考えていた。常に人に見せる自分と本来の自分の二側面があった。荒れていた時期もあったが、恋人との関係で変わってきた。今は自分のことを認められる。自分を許せるようになって人を許せるようになってきた。

A：対人関係で悩んだことはあまりない。自分と他者を理解するために必要なもの。小学生はどちらかという弱者の立場。小3の時に父親が事故で亡くなったのを機に1人でやっていかないといけないという意識が強くなった。自分がいて、相手がいるというスタンス。人と会うのは好きだけどLINEとかで連絡とるのは嫌。

D：対人関係でみんなみたいな型がない。自分も自分自身が分からない。周りからの情報を溜めておいて自分はこうなのかな？と再確認している感じ。女性として女性が好きという枠に当てはまらなくてはいけないと思っていたけど、それは違うなと思うようになった。それから適当になった。

(2) フリートーク

1) ターニングポイントについて/2)  
対人関係の在り方について/3) SNSの扱い方について/4) 友人関係と恋愛/5) レズビアン、バイセクシュアルについて

(3) 筆者のコメント

1回目に比べると固さは緩んだが、まだお互いに探り合っている状態であった。そのため、1つの話題が終わると沈黙になる場面が多く、メンバーもその沈黙に気まず



さを感じていたようだ。しかし、話をしていく中でメンバー同士の掛け合いも増え、前回よりも自由に話が展開していく様子が窺えた。あるメンバーが話し始めると話に熱中して長い時間話し続けることから、他のメンバーが聞き役になることが多かった。

● Se.3 「わたしにとっての異性/同性とは」

(1) 4分間トーク

S：自分が求めるのは男性だけど本当は嫌い。女は面倒くさいって気持ちが先行する。自分の中では友達の仲に性はない。「男うざいわー」の〈男〉は性対象としてであり、友人になりえない存在の男性を指す。

D：考えたことがない。男と接する機会があまりなかった。避けてきている部分もある。同性は友人もあり、恋愛もありで考えている。面倒くさいと思ったら切っちゃう。

A：同性は知っている存在。異性は知らない存在。中学の時の男女の区別をまだ引きずっていることに気付いた。男女問わず人として見なくてはと思う。

E：男子の中にも女子の中にも違和感を覚える。性別はいらぬ。男性は男性で嫌いだし、女性は女性で嫌い。でも両方とも好きで、どちらかというとなら女性の方が好き。だけど、中性的な方がいいのかな。

B：子どもの頃から女性は守るべき存在で、男性は女性をいじめる存在。幼稚園の時から女の子は男の子を好きなになるものと気づき、(男の子を)気に入らないといけなかなと思ってた。小学校は女子

の派閥が嫌いで、遊ぶのは男の子が多かった。理由付けが要らなくて好きになるのは女性。理由付けが必要なのは男性。

C：大学前後で考え方が変わった。高校まで男との交流がなかったが、大学で周りに急に男性が増え、初めは怖かった。徐々に彼女がいる男性は楽だなと思うようになった。彼女いない男性は怖い。女子といる方が好きだけど、男子の方が楽。自分が女子じゃなきゃいいのと思うことはキャリアの面や1人旅行できない点で多い。ライフイベントが邪魔。

(2) フリートーク

1) Bの話の続き/2) 男性の必要性—〈力〉ということについて/3) 男性の必要性—〈和らぐ〉ということについて/4) 社会の中での男女それぞれの在り方、立場について/5) 男性からされて嫌なことについて/6) 周りに男性がいない環境のDについて/7) 特定のことを〈武器〉にすることについて/8) 同性の芸能人に対して思うことについて/9) 同性同士の付き合い方について/10) レズビアンについて/11) 再び、現在の社会について

(3) 筆者のコメント

2回目のセッションよりも打ち解けた雰囲気話題が途切れることなく移り変わっていった。メンバー同士のやりとりも増え、研究者はほとんど介入しなかった。後半では異性愛者が同性愛者に疑問を投げかけるなど相互理解に関わる話が自然と行われていた。

● Se4.「今までを振り返って」 ※Eは体調不良で欠席。

(1) 4分間トーク

S：自分がLGBTに関心を持ったのは20

歳の時。学部の授業の1コマでトランスジェンダーの方が実際に来て授業をしてくれた。その授業のコメントペーパーで自分もLGBTだというコメントが多くあり「身近じゃん」と思った。実際に当事者と会うと問題を身近に感じることができるという確信をもった時だった。

B：自分が話すことが人に何かしらの影響を与えているということは自分の人生の励みになる。去年X県でLGBT成人式を催行し、みんなが自分のいたい姿で来て、それを共有できたのはすごくいい体験。今まで（LGBTに）関わりがなかった人に『参加してよかった』と言ってもらった時にその人が知らないということに問題があると思った。今後、教育面で当事者にも当事者じゃない人に対しても自分ができることをやっていきたい。この会ではみんなの話を聞いて同じだと思うことも結構あって、違うところもあるけど同じところもあるんだなって感じた。

D：まだメンバーのように自分の中でやりたいことが決まっていない。この会に来て、マイノリティの話に関わらず、個人として頑張っている話を聞いて素敵だな、自分も頑張ろうって思えた。好きな相手も違うし、年齢も違うけど同じ人間なんだなって気持ちになった。今、心理学をやっているのは自分自身のことが分からないから（自分のことが）分かるんじゃないかなって思って入った。将来的には中学校とかで似たような境遇の子がいたら話を聞けたらいいなと思った。そういう方向に進みたいと思った。

C：対人関係のこととかを恥ずかしがらずに赤裸々にお互い語り合える場って素敵

だなって思った。こういう環境が増えたらいいのに。話してて今まで見えなかった自分の一面が分かる時もあった。気になっているけどLGBTの人にとどこまで聞いていいのか分からないことがあったが、話してみると意外とミステリアスなものではなかった。自分と違う人間だと思っていたけど、それは違うなと思った。

A：過去の経験から「レズビアン怖いな」って思っている自分がいて、（LGBTの人を）個人として見ておらず、括りとして見ていることに気付いた。前回した質問の答えも「そりゃそうだよな、当たり前だな」って、触れ合うことで改めて気付けた。関わらなかつたら変わらなかつたのかもしれない。この会で自分の中の偏見が取っ払えた。みんなで共感しあう点もあったから人間って平等だなって、なんで線引きなんてしてたんだろうって。わたしみたいに個人の印象で引いちゃってる人はたくさんいると思うから、そういう人たちにもっと広い目で見れるって伝えていきたい。

## (2) フリートーク

1) やりたいことを模索することについて/2) 教育現場でのLGBTの認識について/3) 〈違い〉について/4) 〈知る〉ということについて/5) 問題意識をもってもらうことについて/6) 今の法律について/7) 男女の違いについて/8) 〈粹〉について/9) 親から受ける影響について

## (3) 筆者のコメント

前回までのお互いを理解し合うという段階から、社会についての話が中心になった回であった。その中でもお互いの考えを理解し合う姿勢があり、終わった後は『濃かったね〜』と皆が口々に述べた。また、本

セッションでこの会が終わることをメンバーはみな寂しく感じていたようだった。

## 2. 参加者の体験

SD法はグループ体験前後で2点以上の差が見られた項目を差があった項目とした。また、全4回のグループ・セッション終了後、一人につき約30分間の半構造化面接を行い、「グループ・セッションを通して思ったこと・感じた事」「グループを体験したことによる心境の変化」についての2点を尋ねた。

### ● Aさん（異性愛・20代）

- (1) 異性愛イメージ語Pre-Post：「明確な→曖昧な（4→2）」「強い→弱い（2→4）」「敏感な→鈍感な（2→4）」「明るい→暗い（1→3）」
- (2) 同性愛イメージ語Pre-Post：「弱い→強い（4→2）」「差別的な→平等な（1→3）」「排他的な→協調的な（1→3）」
- (3) 異性愛-同性愛イメージの差Pre：「曖昧な-明確な」「強い-弱い」「自由な-不自由な」「社交的な-非社交的な」「明るい-暗い」「差別的な-平等な」「排他的な-協調的な」「安心な-不安な」
- (4) 異性愛-同性愛イメージの差Post：「困難な-容易な」「強い-弱い」「敏感な-鈍感な」「差別的な-平等な」

### ● Bさん（同性愛・30代）

- (1) 異性愛イメージ語Pre-Post：「安心な→不安な（2→4）」
- (2) 同性愛イメージ語Pre-Post：「強い→弱い（2→4）」
- (3) 異性愛-同性愛イメージの差Pre：「困難な-容易な」「自由な-不自由な」「社交的な-非社交的な」「敏感な-鈍感な」「差別的な-平等な」
- (4) 異性愛-同性愛イメージの差Post：「自由な-不自由な」「社交的な-非社交的な」「敏感な-鈍感な」「差別的な-平等な」

な」「社交的な-非社交的な」「敏感な-鈍感な」「安心な-不安な」

- (4) 異性愛-同性愛イメージの差Post：「自由な-不自由な」「社交的な-非社交的な」「敏感な-鈍感な」「差別的な-平等な」

### ● Cさん（異性愛・20代）

- (1) 異性愛イメージ語Pre-Post：「敏感な→鈍感な（1→3）」「明るい→暗い（1→3）」「純粋な→不純な（2→4）」
- (2) 同性愛イメージ語Pre-Post：「明るい→暗い（1→3）」「遠い→近い（2→4）」「疎遠な→密接な（4→2）」「差別的な→平等な（3→5）」「排他的な→協調的な（1→4）」
- (3) 異性愛-同性愛イメージの差Pre：「困難な-容易な」「自由な-不自由な」「遠い-近い」「密接な-疎遠な」「排他的な-協調的な」
- (4) 異性愛-同性愛イメージの差Post：「やさしい-こわい」「困難な-容易な」「自由な-不自由な」「敏感な-鈍感な」「純粋な-不純な」

### ● Dさん（同性愛・20代）

- (1) 異性愛イメージ語Pre-Post：「鈍感な→敏感な（3→1）」「不安な→安心な（3→1）」
- (2) 同性愛イメージ語Pre-Post：「自由な→不自由な（1→3）」
- (3) 異性愛-同性愛イメージの差Pre：「やさしい-こわい」「排他的な-協調的な」「安心な-不安な」
- (4) 異性愛-同性愛イメージの差：「自由な-不自由な」「排他的な-協調的な」



- Eさん（異性愛・20代）
- (1) 異性愛イメージ語Pre-Post：「やさしい→こわい（2→4）」「非社交的な→社交的な（4→2）」「暗い→明るい（4→2）」「純粋な→不純な（2→4）」
- (2) 同性愛イメージ語Pre-Post：「自由な→不自由な（2→4）」「平等な→差別的な（4→2）」「協調的な→排他的な（4→2）」
- (3) 異性愛-同性愛イメージの差Pre：なし
- (4) 異性愛-同性愛イメージの差Post：「自由な-不自由な」「社交的な-非社交的な」「明るい-暗い」「純粋な-不純な」「差別的な-平等な」「排他的な-協調的な」

### 3. 考察

本グループの過程と個人面接の内容から相互理解にはメンバーの自己理解と他者理解が進むプロセスが影響していることが示された。このことから相互理解について自己理解と他者理解の観点を踏まえ、考察を行う。

#### (1) 自己理解と他者理解について

自己理解について、野島（1983）は自己について新発見・再発見し、そのような自己を素直に認めることとし、EGの中で非常に大切な中心過程だと述べている。本グループでもA<「レズビアン怖いな」って思っている自分が（LGBTの人を）個人として見ておらず、括りとして見ていることに気付いた>やD<根本的な考えとかはたぶん全然変わってなくて>と言う反面<自分はこのままでいいのかってセッション受けながらずっと思ってた（中略）たくさん考

えたんですけど、最終的には戻ってきました>との言葉から自己理解が進んだ様子が見られた。一方、Eは<わたし全然偏見あるじゃん、ダメじゃんって思った（中略）すごいショック大きかった>と自身の気持ちへの気付きがネガティブな体験となったことが語られた。これについては、異性愛メンバーのSD法「異性愛-同性愛イメージの差Pre」でAとCは複数の項目でズレがあるのに対し、Eはほぼすべて一致していることやE<今まで砂かけて閉まっていたのに、ふーってされて見ちゃって（中略）偏見が出てきちゃった>との語りから、AとCはグループ体験前に自身の中に異性愛と同性愛の違いがあることを認識していたが、Eはそういった気持ちに気付いていなかったことが影響していると考えられる。野島（1981）は、ネガティブなグループを体験した者を「心理的損傷者」と表現し、グループの中で「自己理解・自己受容の過程」がほとんど進展しないことを指摘している。本グループでのEも<（偏見に）気付いたのは2回目（中略）思いたくなくて不確かだと思って>と語り自己受容はほとんど進んでいないことが示唆されており、「心理的損傷者」と一致する。またEの語りから潜在的だった同性愛への偏見が顕在化し（自己理解）、どこかでそれを認めたいという気持ち（自己受容）が芽生えたところでグループが終了してしまったということが推察された。また、このような状態は森園ら（2006）が指摘するように〈全員が発言しなければならない場〉という半構成型EGの特徴が影響したことも考えられた。一方、同性愛メンバーのBはLGBTを知ってもらって1番効果的な方法に

ついて自身が社会に出て話すことだと思っていたと語り、グループを通して<やっぱりそうだった>と改めて自身への気付きがあった様子がうかがえた。Dは<帰る時にそのテーマについて毎回考える（中略）最終的に今のままでいいやというのをセッションごとにやってた>と語り、グループ体験によってありのままの自分を改めて認めることができたようであった。こうした発言からBもDも自己受容のプロセスを歩んだと考えられ、同性愛メンバーの自己理解は〈再発見〉という形で進んだ様子が見受けられた。

このように自己理解の過程は、異性愛メンバーは自身の中の潜在意識に気付く〈新発見〉という形で、同性愛メンバーは自身の中の顕在意識を確認する〈再発見〉という形で進んだ様子が見受けられた。異性愛メンバーについては、A<いつの間にか設けられていた多数派の枠に自分が入っていると思っていて、そういう枠が自分の中にある時点で（LGBTの人と）自分は違うっていうのがあったんだろうな>という語りから、異性愛が多数派で同性愛は少数派という社会の現状から無意識に作り出された認知が、グループ体験を通して顕在化したのだと思われる。一方、同性愛メンバーの異性愛への認識は異性愛メンバーが同性愛に抱くほど偏っておらず、こうした違いが異性愛メンバーと同性愛メンバーの自己理解の過程に違いを生んだのだろう。

他者理解については、異性愛メンバーはAとCはポジティブに、Eはネガティブに他者理解が進んだ様子が見られたという違いがあった反面、A<宇宙人じゃないけどそういう感じに見てたのかも>やC<別に一

緒だったな一って感じ>、E<割と普通の人なんだな>とグループ体験前に抱いていた〈同性愛者と自分は違うものである〉という認識がグループ体験を経て〈同じである〉という認識に変化したことが共通して語られた。これについては、Se2. (4)やSe3. (8)、(10)などでメンバー同士が率直に疑問を投げかけ合う場面があったことで異性愛メンバー、同性愛メンバー共に自身との共通している部分に焦点が当たるような経験がなされたことが影響したのではないかと思われる。他にも性指向に関係なく〈個〉として相手との違いや共通点について対話が行われている様子がセッションの節々に見られ、こうしたメンバー同士の相互交流が他者理解を促進し、互いを知り合ううちに自分と似ているメンバーが自分とは違う性指向であったりして、性指向によって性質に違いが生じているのではないという気付きが生じたのではないだろうか。森園ら（2006）は、このようなメンバー同士の関わりを「知り知られ体験」という言葉を用いて説明しており、半構成型EGの重要な要素であると述べている。本研究でも他者理解、「知り知られ体験」がなされ、また、そのことが相互理解の基盤を築いた様子が見受けられた。

## （2）自己と他者の深くて親密な関係の体験について

このように、自己理解と他者理解はグループの中で同時に体験されており、各メンバーが他者理解をし合うことは自己と他者の深くて親密な関係が体験されたといえるだろう。Se4. (4)の中でCの率直な自己開示に対し、同性愛メンバーのBは自己開示しつつCの意見を受け入れる場面があっ

た。また、Se3. (6)、Se4. (1)でDが自身に対する疑問や葛藤を素直にセッション内で語り、他のメンバーがそれに対して温かな受容、Bからは同じ同性愛者としてのピアサポート的な言葉掛けが行われる場面が見受けられた。Dは<あの場は本当に今わたしがパッと思ったことがポンって言える場所だった (中略) すごい喋りやすかったです (中略) 受け止めてくれている感がある>と語っており、これらの場面でメンバーは本当に相互に知り合った状態であったことが示唆された。このことから、メンバーが相互に受け入れられる体験がなされることが相互理解を促進することが推察された。

また、後半のセッションでは同性愛についての知識的な話も多く見られた。それに対しAやCは当事者の口から語られることで実際の困り感をリアルに体験したと語っており、知識が他者理解および、相互理解に与える影響は大きかったと思われる。さらに、Se4. (2)でB<中学生～高校生らへんが1番厳しかった。辛いよね>、D<中学の時が1番きつかった。知識も全然ないから (中略) 最初、自分は男だと思っていた。女好き=男だったから。でも性自認女だしなんだこれ>と同性愛メンバーから知識不足によって混乱に陥った過去が語られ、同性愛への知識は異性愛者だけでなく当事者である同性愛者にも不足していることが明らかとなった。こういったことから、同性愛への知識を深めることは異性愛、同性愛に関わらず求められており、先行研究 (柳原, 2000; 桐原・坂西, 2003; 上野, 2008) でも述べられているように同性愛への知識を深めることは相互理解のた

めに欠かせない要素であることが本研究で改めて示された。

一方でグループ体験をネガティブに語ったEは4回目のセッションに欠席したことや自己理解体験が大きな衝撃となったことから、今回のグループ体験で自己と他者の深くて親密な関係が体験されたとは言い難い。しかし<(4回目は) 体調崩して行けなかった (中略) 行きたかったな、もうちょっと会って話したかったな>という発言や、個人面接の中で研究者の<もし4回目に参加していたらどのような話がしたかったか>という問いに<わたしは (偏見を) 持つてる。けど、嫌いじゃないにしたかった>と語ったことから、もう一段階深い関わりをメンバーに希求していたことが推察された。

### (3) グループ体験が相互理解へ与える影響について

前述の内容から本研究のグループは異性愛者と同性愛者の相互理解のために有効に働いたといえるだろう。相互理解が促進された要因としては、半構成型EGの特徴である毎セッションテーマに沿って自分語りをするということ、安全感が前面に出たグループであったことという2つの要因が大きく影響したと思われる。また、多くのメンバーがSe3. 前後でグループの印象が変化したと語ったことから、深い話をするための基盤がグループの安全な雰囲気の中で作られ、異性愛メンバーと同性愛メンバーの双方の心の準備が整い、本当の意味での相互理解が始まった段階がSe3. 前後であったといえるだろう。そしてこのことからEはレディネスが整っておらず、相互理解を深めるまでの基盤が作れなかったことが

グループをネガティブに体験した一要因であることも推察された。さらにグループの展開についてももう少し詳しく見ていくと、Se1.やSe2.では話題が転々とし、どこかメンバー同士が探り合っているような様子だったが、Se3.では話題が流動的に展開され、Se3.(1)や(3)のようにメンバーがグループをファシリテートするような場面も見受けられた。特にSe3.(3)ではメンバーの発言に違和感を抱く筆者にBがすぐさま声掛けを行なってくれたことで筆者自身も率直に語ることができ、違和感がふっと消える体験をした。野島(2000)はグループが展開期に入るとメンバーのファシリテーター化が生じ、同時にファシリテーターは次第にメンバー化し、メンバーとほとんど変わらないような行動をとったりそのような意識になったりすると述べていることから本グループではSe3.が展開期になったことが推察された。加えて、相互理解の背景には異性愛メンバーの自己理解によって同性愛への偏見が低減されたことが大きく関わっていたこともメンバーの発言から示唆された。偏見の低減について接触体験が重要であることは多くの研究で指摘されており(山口・三野;2007;山本・大蔵・重本,2012)、本グループはAllport(1954/1968)が挙げた接触効果を有効にするための必要条件ともほぼ一致していた。つまり、本研究のグループの構造や特徴は接触効果を生み出す要素を十分に含んでいたことが、異性愛メンバーの偏見の低減に繋がり、結果として相互理解を促進したといえるだろう。

#### (4) 総合考察

本研究のグループではメンバーの自己理

解や他者理解を促され、深まる過程で相互理解が行われた様子を見ることができた。一方で、野島(1981)で指摘されているように体験には差が見られ、自己理解・自己受容が十分なされない場合、相互理解も十分になされないことが示唆された。また、相互理解の重要な要因として、同性愛への知識が深まることや偏見の低減があることも本研究の結果から示された。

#### (5) 本研究の限界と今後の課題

今回は1グループのみの実施であり、セッション回数も4回という非常に少ない回数であった。このことから、本研究で得られた結果の汎用性は完全には認められたとはいえないだろう。一定の効果が見るためには今後、複数回同様のグループを実施し、また、継続的なグループが女性同性愛者と異性愛者の相互理解に与える影響についても検討する必要があるだろう。二点目にフォローアップ・セッションが行えなかった点が挙げられる。本研究は修士論文作成のための研究であったため十分な時間をとることができず、グループの効果の持続性について確認が行えなかった。今後はより精緻にグループの効果を探るためにフォローアップ・セッションの実施が求められる。三点目としてはグループが20代~30代という限られた世代で構成されたことである。女性同性愛者と異性愛者の相互理解という点を検討するためには他の世代でも本研究と同様の効果が得られなくてはならない。そのため、今後はより幅広い年齢を対象にグループを実施することが望まれる。

しかし、本研究では女性の同性愛者と異性愛者によるグループがメンバーの自己理解や他者理解が促進し、深まっていく過程



で相互理解が行われた様子を見ることができた。今後はメンバーを固定化せず行う「開かれたグループ (opened group)」を実施することで、より社会に馴染んだ形で女性同性愛者と異性愛者の相互理解の促進が期待される。

## 謝辞

本研究を行うにあたり数か月間、研究調査にご協力して下さった5名のメンバーの皆様にご心より感謝申し上げます。また、論文作成にあたりご指導いただきました野島一彦教授に深く感謝いたします。

## 参考文献

Allport, G.W. (1954). The nature of prejudice reading, MA : Addison-Wesley.  
(原谷達夫・野村昭 (共訳) (1968).  
偏見の心理 培風館)

Cass, V.C. (1979). Homosexuality identity formation : A theoretical model. Journal of Homosexuality, 4, 219-235.

Dillon, F.R., Worthington, R.L., Soth-McNett, A.M., & Schwartz, S.J. (2008). Gender and sexual identity-based predictors of lesbian, gay, bisexual affirmative counseling self-efficacy. Professional Psychology : Research and Practice 39, 353-360.

日高庸晴 (2016). ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルス こころの科学 189, 21-27.

稲葉昭子 (2010). 学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ 創価大学大学院紀要32, 259-280.

石井香里 (2009). 女性同性愛者が抱える

生活上の問題に対する当事者の姿勢—同性パートナーと同居する女性のインタビュー調査から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 3, 65-76.

石丸径一郎 (2008). 性の多様性モデル 臨床心理学 8, 336-340.

石丸径一郎 (2016). 性的マイノリティのカップル・家族関係 日本家族心理学会 (編) 家族心理学年報34 金子書房 pp. 62-69.

金城理枝 (2016). 心理職によるLGBTへの支援 こころの科学189, 39-44.

桐原奈津・坂西友秀 (2003). セクシュアル・マイノリティに対するセクシュアル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応 埼玉大学紀要教育学部 (教育学科) 52, 55-80.

廣梅芳 (2009). 女性同性愛者のサポート・グループ 高松里 (編) サポート・グループの実践と展開 金剛出版 pp162-177.

Matsutaka Y, Kihana N, Uchino T et al (2014). Knowledge about sexual orientation among student counselors : A survey in Japan. International Journal of Psychology and Counseling 6, 74-83.

松高由佳 (2016). 同性愛とクリニカル・バイアス 精神療法 42, 42-47.

森園絵里奈・野島一彦 (2006). 「半構成方式」による研究型エンカウンター・グループの試み 心理臨床学研究, 24, 257-267.

野島一彦 (1981). エンカウンター・グループにおけるあるLow Learnerの事



- 例研究 福岡大学人文論叢, 13, 583-618.
- 野島一彦 (1983). エンカウンター・グループにおける個人過程-概念化の試み- 福岡大学人文論叢 15, 33-54.
- 野島一彦 (2000). エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版
- 上野淳子 (2008). 心理学における性的マイノリティ研究—教育への視座— 四天王寺大学紀要 46, 73-82.
- 和田 実 (2010). 大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響 心理学研究 81, 356-363.
- 山口創生・三野善央 (2007). 精神障害者に対する偏見減少のための教育的介入の効果 高校生における教育的介入の評価 日本公衛誌 12, 839-846.
- 山本章加・大蔵雅夫・重本津多子 (2012). パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響 徳島文理大学研究紀要 84, 85-91.
- 柳原真知子 (2000). 看護学生のセクシュアリティとセクシュアリティ教育 東北大学医療技術短期大学部紀要 9, 161-173.